



Title	D.H.ロレンスの『虹』に見る「知識」と「技術」と「願望」の主題 (その1)
Author(s)	中村, 嘉男
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1977, 17, p.95-105
Issue Date	1977
URL	http://hdl.handle.net/10069/9664
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-19T20:36:20Z

D. H. ロレンスの『虹』に見る「知識」 と「技術」と「願望」の主題 (その1)

中 村 嘉 男

The Theme of Knowledge, Art, and Hope in *The Rainbow* by D. H. Lawrence (Part 1)

YOSHIO NAKAMURA

I

D. H. ロレンスの四番目の長編小説『虹』に対しては、彼のそれまでのどの小説よりも深く神話的な理解が要求されているように思われる。まず、物語の最初に登場するブラングイン家の女性の願望について、それを神話的に理解しないところに、例えばリーヴィスのそれに対するほとんど無批判な賛辞や、逆に J. E. ストゥルの一方向的に否定的な評価が生まれてくる素地があったのではあるまいか。リーヴィスは彼女の願望について、「『もっとすばらしい、もっと生き生きとした生活圏へは行ってゆきたい』という願い、……子供によせるこの母の願望が完全に俗物根性とは異なったものであることに我々は既に注目した。彼女が外面的な上品さの優位を重んじるのは、それが『高次の存在の形式』を約束するからである¹⁾」と語っている。これに対してストゥルは、「ブラングイン家の女性が生の広がりや自由を求めて外の方を見るとき、彼女は脈打つ創造の熱、生との有機的な関係を感じとる力を失い、支配的で創造的な男性に対する生れつき従順な関係を破壊する。」²⁾と述べるのだ。

断るまでもなく、これら大きく隔たった二つの見方には、それぞれ一面の真実が含まれている。問題は、一面的な真実では『虹』に見られる人間存在の根源的な二元性に対する認識が得られないということだ。この認識は、旧約聖書の「創世記」やヘシオドスのギリシャ神話に見られるものと同質のものであり、それぞれがヘブライズムとヘレニズムの一つの源泉となったこれらの神話は、『虹』において相互に関連しながらお互いの意味を深めつつ、その小説の中心主題に根底から係っているように思われるのである。この問題をこの小論では、「知識」と「技術」および「願望」という観点から追究してみたい。

※

よく知られている『虹』の第一章の一において、充実しながらも停滞しているブラングイン家の人々の生をまず最初に揺り動かすのは、その一家の女性である。この女性の役割りは、エデンの園におけるエバのそれに本質的に類似している。「血的交歓」のもたらす生命の充溢感に無意識的に浸っているその一家の人々の状態は、アダムとエバのエデンでの生活に対するロレンス独特の現代的改作である。だが、ブラングイン家の女性は、そのような「熱っぽい、盲目的な生命の交流の彼方に、たえず声ある世界を見つめ」ながら、世の人々が「知識を得ようと外に向って闘っている」世界で、自分も「また知りたいと思った、闘う人々の中に入りたかった。」³⁾のだ。

「知識」に対するロレンスの考えは、彼自身の「我々の目標は知らない術を知ることである。」⁴⁾という言葉に要約される。すなわち知識は、人間の呪いであり、かつそれを通してしか人間の救いはありえないところのものである。もとより、呪いとなる知識と救いとなる知識は質の異なったものであろうが、後者によってのみ生きることは、人間にはできないことなのだ。というのも、両方ともその根を意識においているからである。そして、知識のこの二元性は、この小論の最初に述べたブラングイン家の女性の「願望」の二元性と複雑にからみ合って、『虹』の主題の方向を決定するのである。

「願望」に関する最も有名な神話は、おそらくパンドーラ神話であろう。パンドーラは周知のように、聖書のエバに相当する人類最初の女、その名は豊穡なる「大地」、「贈物多き女」、「すべてを贈る女」という意味である。⁵⁾彼女が神々より送られてこの地上にもってきた箱には様々の悪が含まれており、それらが地上に広がって人類の苦しみが始まった。が、アダムとエバの墮落にも似たこの状況は、いわゆるパンドーラの箱に最後まで残っていた「希望」によって新たな展開を見せる。ヘシオドスの『仕事と日々』によれば、この「希望」は、すでに箱から飛び出していた諸悪の母「エリス」（競合、争い）と微妙にからみ合って、人の生を美しく開花させる積極的な力になることがあるのだ。

『仕事と日々』によれば、「競合の神々の族は一つではなく、^{エリス}「二つ」であり、「その一つを悟るものはこれをほめたたえるであろうが他の一つはそしりを受ける」ほど、この二つは大きく隔たったものである。そして、前者すなわちよい競合の女神を、「高空に住う神（ゼウス）は、大地の根のあいだに置き、人々に与えるはるかによきものとした」ので、この女神のもとにいれば、「隣人が富をつもうと精だすのを見」て「負けじとはやるのが人のつね」であっても、人はそのような競争心を「世の宝」に変えることができるというのである。⁶⁾

隣人が自分よりも多くの「富」をもっていることを「知」り、自分も「希望」し、競争心を燃やす。もちろんこのような希望と競争心は、この地上においては人を破滅させる因にもなれば、人を更に「高次の存在形式」へ導く動因となることもある。その分れ目になるのが、ヘシオドス

によれば、「大地の根のあいだ」なのである。この言葉が何を意味するかは、各人がそれぞれの人生で解決してゆかねばならない問題であろうし、また、『虹』においてロレンスはその答えを見出そうとしている問題でもあるのだ。

ブラングイン家の女性も、なぜ牧師はあまり裕福ではないのに自分の主人より「すぐれている」のかと思う。そしてまた、牧師の子供たちがまだ小さいのにすでに自分の子供たちとは異なっていることに気づき始める。彼女は、それが「金」や「階級」のせいではなく「教育と経験」のためなのだと考えて、せめて自分の子供たちには「知識」を身につけることによって更に「高次の存在形式」を成就してもらいたいと「希望」するのである。この「希望」と「競合」⁷⁾のからみ合った気持は、それ自体ではリーヴィスの言うように、停滞した生を動かすものとして積極的に評価できるかもしれない。が、それは、矛盾に充ちた現実に係っていくときに、しばしば「大地の根のあいだ」から遊離して悪しき方向へ向うのだ。リーヴィスの言う「完全に俗物根性とは異なったもの」であり続けるわけにはいかなくなるのである。

ブラングイン家の女性、具体的にはアルフレッドやトム之母親は、農場に残っているトムより、そこから出てノティンガムのレース工場の図案工になっているアルフレッドを誇りにしている。彼が農場に「いないで、レース図案工として、ほとんど紳士に近い暮らしをしているというただそれだけで」、彼は「英雄視され」、「縛られたプロメトイス」として母親や妹から愛されるのだ。⁸⁾ところがこのアルフレッドは、内に何かを秘めながらも、形式を打破できない「俗物」として提示されているのである。彼は「技術」を身につけることによって農場から出ることはできたが、今度はその技術とか当代はやりのH・スペンサーやR・ブラウニングに関する銜いとしての知識によって「縛られ」てしまうのだ。そして、そのような全くアルファベットの技術や知識を越えて、真に自分が解放される方向へ歩みいろうとする努力を、彼は一切しようとしないのである。⁹⁾

アルフレッドの弟トムは、彼が農場にとどまるのを選んだことに象徴されるように、「知識」とか「技術」にそれほど侵されていない、いわゆる「洪水以前」の人間である。そしてこの事実、彼の魅力と限界が存在するのだ。彼の魅力は、一口に言えば、プロメトイスの弟エピメトイスとしての魅力と言えるかもしれない。エピメトイスは普通、賢明な兄の忠告を無視してパンドーラを妻に迎え、人類に思わぬ災をもたらしたおろか者としてあまりよく思われていない。しかしゲーテの未完成の祝祭劇『パンドラ』においては、技術を使つての仕事¹⁰⁾を第一と考える現実主義者の兄より、パンドーラの魅力に屈して彼女を受け入れ、「やさしい愛の思い」で生活を充した弟の方が、創造的な歓喜が咲き出る生への近道に立っているのである。『虹』においてもまた、妻をないがしろにし、銜いとしての知識を愛人のインテリ女性と共に求める「縛られたプロメトイス」としての兄アルフレッドより、運命によって引き合わされた外人女性リディアに一目で恋をし、彼女との充実した結婚生活によって人間的な深みと幅を獲得するトムの方が、ロレンスの理想にはずっと近いところにいる。災の箱をもってきたパンドーラのように、リディアもトムから「心の底まで人間らしい感情のない……あくまで異邦人の……悪女であり、あらゆる悪い

……いやなもの権化である」と非難されることもあるが、「腹の底」ではトムから感謝されており、「失いたくない、……失いはしないぞ¹¹⁾」と思われているのである。彼等二人の関係の充実ぶりはリーヴィスによってすでに言い尽された感がある。正確には、「存在」→「知識」→「新しい存在」と図式化されるべきロレンスの思想が往々「存在」対「知識」と単純化されすぎるように¹²⁾、つまり「存在」と「新しい存在」の区別が分らなくなるように、「洪水以前」の人物として「存在」に最も近いトムは、ロレンスからあまりにも深く描きこまれたので、ほとんど「新しい存在」を成就した人物として評価されても仕方のない面があるのだ。いや、たしかに彼は、知識や技術の迷路に踏みこまなかったため、かえって、『虹』で「新しい存在」に最も接近することができた人物であると言えるかもしれない。しかしながら、知識や技術の迷路に踏みこまなかったということが同時に彼にもたらした限界にも注意を払わなければ、リーヴィスやストゥルのように、『虹』のほとんど半分近くを占めるアーシュラ・セクションの意味を、中心主題によって十分に統一できないままで終ってしまうことになるのである。¹³⁾

トムの限界は、最愛の娘アナが結婚し、リディアとの夫婦生活もすっかり落ちついたあとで明らかになる。子供たちがそれぞれ立派に成長し、彼自身も経済的に安定した貫禄ある「農紳」になったとき、彼の生はもはや崩される心配のない満足感のうちによどんでしまうのだ¹⁴⁾、言わば、彼は「エデンの園」的な状態に逆戻りしてしまうのである。エデンに対するロレンスの考えは、トムの孫アーシュラのある純朴な青年に対する関係のうちに明示されている。アーシュラはこの青年のつくっている菜園について、「こんなきれいなところに住んで花や野菜をつくってらしたら、もうなんにも言うことないんじゃないありません？エデンの園ね、まるで。」と言う。以前から彼女に好意を抱いていた青年は、彼女に「僕と一緒に、ここに住みませんか？」とこわごわプロポーズする。だが、美しい自然の中での純朴な好青年との生活をアーシュラはどうしても受け入れることができない。彼女には彼と自分がお互いに全く異なった道を歩まなければならないことがはっきり分っていたのだ。

She turned away, she turned round from him, and saw the east flushed strangely rose, the moon coming yellow and lovely upon a rosy sky, above the darkening, bluish snow. All this so beautiful, all this so lovely! He did not see it. He was one with it. But she saw it, and was one with it. Her seeing separated them infinitely.¹⁵⁾

言わば、この場面で、「存在」そのものになっている青年に対してアーシュラは「新しい存在」であり、二人の間には「無限」の距離が介在しているのだ。エデンに帰ることは、高等教育を受け、高度に発達した意識をもつようになったアーシュラにはとうてい不可能なことなのである。

「彼女自身の楽園」は、エデンの外にしか存在しえないし、彼女は結局、「大地の表を行く一人の旅人」として、「どんどん進んで行くよりほかない¹⁶⁾」のだ。

だが、子供たちがそれぞれ立派に独立し、彼自身も裕福な農神になって何もかもすっかり安定したときに、アーシュラの祖父トムが「なんとなく物ぐさになり、充ち足りた安逸に入って行くのはまことにやむをえないことなのかもしれない。彼は言わば「存在」へと退行してしまうのだが、おそらくこれが、彼が洪水で死んでしまう最大の由縁となっているのだろう。何と言っても、「アナの結婚以来、マーシュ農場は、二人の息子、トムとフレッドの家になつてしまっており、特に父とはほとんど正反対の性格をした息子のトムは、「農場自身に変化を及ぼしてしまった」のである。彼は父と異なり、「頭のいい若者」で「ハイスクールを出ると、ロンドンへ勉強に出」かけ、ある「技師の助手」になって「ロンドンで最も活動的な科学者、数学者の幾人か」と交際するほど出世した。その彼が農場にときどき帰って、その「調子を変えて」しまったのだ。¹⁸⁾ 加えて、「縛られたプロメトリス」アルフレッドの子ウィルが、アナと結婚してマーシュ農場の近くに移り住んだ。彼は従弟のトムほど知識は身につけていないが、父親譲りの「技術」によってコスゼイの村に「木工塾」を開設し、「手工教育」に熱中するようになっていたのだ¹⁹⁾。こうして「知識」と「技術」の波がマーシュ農場までおし寄せていたのに、父親のトムはもはや変りようがないほど安定していた。彼はどうしようもなく「洪水以前」の人間だったのだ。「洪水以前」の、知識や技術にまだそれほど侵されていない人間であったことが、リディアと彼との間に「新しい存在」を可能にした一要因であったが、また同時にそれは、彼を「存在」へと退行させた悪因にもなったのである。

J. E. ストゥルは父親のトムの溺死に関して、「トムは自分自身を他から切り離すことに失敗して——それは自己変革への第一歩であり、ウィルとアナの関係によって例証される一歩なのであるが——ついに子宮へ退行してしまう²⁰⁾。」と言っている。ストゥルの考えの一つの特徴は、「洪水以後」の人間ウィルの方が、それ以前のトムよりすぐれていると見るところにある。その根底は上に見られるように、「男性の独立」である。が、これはあまりにも安易にすぎる見方ではあるまいか。ウィルの「独立」は妻アナとの妥協的な関係の中から生れたものであり、更にそれは次女グドルーンに受け継がれる芸術家の「孤立」とも密接な繋りをもつようになるのであって、否定的な要素も当然その中に含まれているのである。ロレンスが『虹』において最も多く参照した聖書は、さすがにこれほど安易な形で「洪水以後」の人間の優越性を主張してはいないのだ。

聖書においては、洪水の前と後の人間の差はあまり明確ではない。神が洪水をおこされたのは、人間が「恒にただ悪しきのみ」(‘only evil continually’²¹⁾)であったからであるが、洪水の後でも神は、「われこの後は再び、人間の故に大地を呪わじ。げに人の心の望み^{おきな}思いは、その幼少^{おきな}頃より悪に傾けばなり²²⁾。」と言っている。言わば人間の本性的な悪への傾向にさじを投げた形であるが、ただ洪水の後には、‘only’ と ‘continually’ の二語が「悪」の状態から除かれており、そこに人間が「悪」の場からさえ真善美に至れるのではないかという「希望」が残されたのである。とはいえ、この「希望」実現のための鍵となるものが、ストゥルの言う「男性の独立」にのみ存するとはどうい考えられない。鍵が見出せるか否かは、神話的な意味の深さと広さをもつ「知

識」と「技術」の、洪水後における生かし方のいかんにもかかっているように思われるのだ。

その「知識」と「技術」は、しかしながら、今日の人間にとって何と重たい十字架になってしまったことだろう。我々は、急速に増加しながら専門化してゆく知識や技術の迷路の中で、自分自身を見出すことがますます困難になっている。加えて、そのような知識や技術が与えてくれる物質的な豊かさが、真実の問題を隠す温かく気持のよいベールになっているのだ。この重い十字架を真に人間の救いとすることができるかどうかという問題は、まず最初ウィルとアナの関係を通して、次に彼等の長女アーシュラの勇敢な生き方を通して、徹底的に追究されるのである。本章ではまずウィルとアナの関係を中心にして、この問題を検討してみたい。

II

ギリシャ神話においてノアの洪水に相当するものは、プロメトイの子デウカリオンが方舟に乗って生きのびた、いわゆる「デウカリオンの洪水」である。「縛られたプロメトイ」の子ウィルも、父から「技術」を受け継ぎ、洪水後の最初の主人公として、人間の呪いを救いに変えるべく、まだ十分に意識化されていないが、彼なりの努力を重ねる。彼は、技術を単に生計の手段となし、当代流行の知識によって社会的優越感をもとうとした父とは多少異なっていた。それは、彼の生れ育った町であり知識と技術のその地方における一大中心地でもあるノティンガムから離れて、マーシュ農場の近くに彼が移り住んだことからもうかがえる。彼は言わば、父よりも「大地の根のあいだ」の近くにいたのである。「プロメトイ」の子として「技術」を受け継ぎながら、彼はむしろ叔父の「エピメトイ」に似て、妻アナとの濃密な感情生活に自己の最も深い存在理由を求めたのだ。ロレンスはまず最初、「技術」をもちながら「大地の根のあいだ」に深く係って生きるこのウィルによって、洪水後の人間、すなわち我々の十字架となった「知識」や「技術」のあり方を考えてみようとするのである。

※

ウィルとアナの関係に見られる一番の特徴は、何と言っても、その絶え間のない激しい争いであろう。それは二人が結婚してほとんどすぐに起る。二人だけの充実した夜の世界からさっと日常的な昼の世界に戻るアナの変り身の速さに、ウィルはどうしてもついてゆけなかったのだ。「彼としては、もう外界などとは絶縁して、永久に、さよならが宣言したかった。このまま、彼女と一緒に、時間のない宇宙、自由な、完全な四肢と、不死の胸との宇宙に住んで、古い外の世界などとは、永久に訣別を告げてしまいたい、激しい渴望に燃えていた」のである。にもかかわらず新妻のアナは、彼の「渴望」には全く頓着せず、「お茶の会を開きたい」というのであった。²³⁾このアナの平凡極まりない現実への復帰を阻止するためには、ウィル自身が昼の世界へ新しい形をとって入る以外にはない。彼が激しく燃える「渴望」を外界へ向けて表現し、そこでそれを

生かし切ったとき、初めてアナは自分の軽薄な日常生活への復帰を恥じるであろう。それに、ウィルは、この「渴望」実現のための具体的な方法をもたないではなかった。それは彼の木彫の「技術」である。彼は結婚したときもちょうど「エバの木彫」に取り組んでいたのだ。「今のままでは、まだ満足とは、いかなかった」が、「今度こそ、あの優しい、輝くエバを、完成してみよう。」²⁴⁾と彼は考えていたのである。

だが、その「完成」へ向うははっきりした方向を、結婚したばかりのウィルはまだつかめなかった。 「僕のエバがね、少し堅くて、勢いがよすぎたかなと、思ってたんだ。」とアナに説明できても、彼女の更に突っこんだ「なぜ？」という問いに対しては、「さあ、僕にも、よくわからないが。とにかく、もっと——」と答えるだけで、あとはただ「かぎりなく優しいしぐさを、自身²⁵⁾してみせ」るだけなのだ。これでは折角の技術も発展のさせようがないのである。ただ、この技術を発展させる知識の獲得は、可能性としては、これからの夫婦関係の「充実」いかにかかっていると見えるだろう。この「充実」が新しい技術の発見を可能にする知識を醸成し、逆に新しく見出された技術が今度は二人の生活の「充実」度を一層高めるといった相互的な関係が、可能性としては当然考えられるのだ。

ウィルとアナの生活の「充実」は、最初のうちは、結婚後まもなく始まった彼等の「争い」を通して可能になるのではないかと思われた。日曜になれば教会へ行き、誰にも制約されずに暗くて深い己れの内部世界に閉じこもろうとするウィルにとって、外部から、現実の場から攻撃をしかけてくるアナは、外へ通じるドアの有力な鍵になってくれる可能性があったのだ。

ウィルは自分の深い無意識的な宗教的感情を語彙の不足や知識の不十分さのため自分で表現できず、必然的に既成の教会や教会芸術に自分自身の感情表現の方法を求めざるをえなかった。が、十九世紀の末に生きながらこれらもはや旧式となった表現形式に頼らざるをえない彼に、アナはどうしても我慢できなかったのである。彼女もまた、「充されない渴望」を胸の底に秘めながら、現実の生活の中でそれに形を与えてくれる創造的な知性をもちあわせないでいた。が、少なくとも彼女は、既成の教会や教会芸術では自分の渴望はいやされないことを知っていたのだ。善人になれという教会の教えを現実に生かそうと努力してみたこともあったが、それがとうてい不可能だと分ったときに、彼女は、自分の「胸の底の渴望」が「もっとほかの何物か」を求めて湧き上がってくるのをどうしようもなかったのである。それゆえ夫が教理を「単なる音」としてしか聞かず、「ただ暗い、名状しがたい情緒」に浸りこんでいるのを見ると、彼女はその眠れる鈍重な知性にムラムラと怒りを覚えてこざるをえなかった。そして、教会の中で、また宗教画や彫刻に見入りながら、一人忘我の状態に浸る夫にすっかりいらいらして何度となく攻撃をしかけたのであった。²⁶⁾

だがウィルの方は、この挑戦に単純に腹を立てるだけで、結局、元の状態に戻ってしまうのである。つまり、相変らず彼は教会や教会芸術から離れようとしなかった。しかし、もし教会のステンドグラスの子羊が、ウィルの言うように「復活の勝利を意味する」²⁷⁾のであれば、それはそれ

自体とは違った表現をとらなければならない、というのがアナの信念なのである。アナの知性は、もはや使い古されたキリスト教の象徴では自分の内奥の渴望は充されないということを知っていた。だが、悲しいかな、その種の知識だけでは内奥の渴望に形を与えることはできないのだ。カナで水が酒に変えられたことを、彼女は夫に挑戦するため知性によって否定するが、否定するだけの知性では創造はできないのである。

ウィルも一瞬ははっきりと「理性の曇りなき目で」水が酒に変わるはずはないと悟る。しかし彼の「魂」は、そのような「理智」に逆って「狂気のように叫ぶ」のだ。「それは彼自身にとっては本当におきた²⁸⁾」ことなのである。「魂」がこのように深く信じているものを、どうして常識的で合理的な理性によってあっさり否定し去ることができようか。だがアナにしてみれば、水が酒に変わったという奇跡を、「理智」にも納得できる形で証明して欲しいのである。言わば彼女は、夫に、無限に対する深く暗い感情を抱いたまま現実の場に、光の中に、出てきてもらいたいと、心の奥では望んでいたのだった。

とはいえ、魂と理智、内部世界と外部世界、夢と現実の間に橋を渡し、「新しい存在」、「本当の自分自身」に至ることによって水（日常的自我）を酒（本来的自我）に変えることがいかにむづかしいかは、ここで改めて強調するまでもないであろう。ロレンス自身、晩年の「自伝的小品」で認めていたように、特にこの奇跡の成就是对他関係において著しく困難なのである。ロレンスは、「非人間的な、声のない何か」との関係には自分はかなり成功したが、対人関係ではもう一つうまくゆかず、「自分と他の人々」との間に「さけ目」があったとそこで述懐している²⁹⁾。ハックスレーが生き生きと伝えてくれるあの天才的生活者ロレンスでさえ、このような挫折感をもっていたのだ。ウィルがアナとの関係をなおざりにしたまま日曜日の個人的な世界に没入しようとするのを突き離れた形で批判できる人は、無神経な批評家たちを除いてほとんどいないと思われるのも当然であろう。

ウィルが妻との関係を十分に発展させることができなかったのは、彼が妻の挑戦を回避したためばかりではない。妻アナの方にも責任の一端はあった。彼女の場合、特に女性ということもあって、日常的な現実への没入が比較的早くから始まったのである。彼女はほとんど毎年のように妊娠し、その肉体的な充足感の中に一人浸って、相変らず彼女との暗い閉された濃密な世界を求めてやまないウィルを突き離すようになったのだ。彼女を自分の生命の「根源」とするウィルにとって、これはまさに彼女という「方舟」から「暗黒の海」へ突き落されるような思いであった。彼にしてみれば、「アナと別れた生活」は、「おそろしい混乱、まるで一切が暗い、無意味な、底なしの海に押し揉まれているような混乱に思える」のである³¹⁾。

こうして彼は、妻に完全に寄りかかっていたために感じる「暗澹たる怒りと屈辱と失望³²⁾」に毎日苦しめられる。だが、このような状態が「もはや我慢の限りを越え」る時がついにやってくる。「物憂い暗い灰色の時期がしばらくつづいたあと、彼は、とうとう張り詰めた力もなにも弛んだような気持で、ぐったりとな」り、「まるで溺れた時のように、ものみなが曖昧模糊と感じられ

て来」て、なぜか「すっかりホッとしたような気持」になるのであった。³³⁾

ウィルがアナから離れ「一人でいられる」ようになったのは、妊娠して自分だけの世界に充足するようになったアナに対する彼のこのような妥協的な気持の結果であった。厳しい闘いを通して得られた自我ではないため、必然的にそれは、「ひどく無口で、非力で、われながら心細い、いってみれば罰いまわる幼児のような自我だった」が、「それにしても、とうとう自由、独立、変ることのない自由を彼はつかんだ。」³⁴⁾のである。

こうして彼は自分を「限るある限界」の中でときに狂気に捉えられ「破壊衝動」にかられることもあったが、結局、「自分を相手に、おそろしい死闘をして、しまいにはまたアナの許へ帰って来る」³⁵⁾という妥協的な日々を送ることになった。が、あるとき、彼はノティンガムの劇場で知り合った娘を誘惑しようとしたことによって、「一切の『善良な』束縛から解放され」、その結果、自己充足に浸っていたアナを強く刺激し挑発して、二人は新しい愛の段階に到達できるようになるのである。³⁶⁾

その新しい愛は、今まで以上に激しく官能的なものであり、ウィルはアナと「ただもう二人だけの官能遂情という、死の暗黒の中だけに生き」るようになる。そしてこの変った愛の姿が「狂暴なまでに活動的になるにつれ、……彼の中の別のブラングインを解放」することになるのだ。彼は「肉体のもつ官能美に対する、飽くなき激しい遂情」に没入することによって、「外部の社会生活」に対しても興味を抱くようになったのである。すなわち彼は、当時問題になっていた「手工教育」に着手したいと思い、村に夜学の「木工塾」を開設しようと考えたのだった。³⁷⁾

以前は彼は、人間の「理智」が成し遂げたことにほとんど興味を抱けないうでいた。用事でロンドンに出かけたときも、「河の畔りを槍を手にして魚を追っていた哀れな野蛮人どもが、どうしてまたあの大ロンドン……を打ちたてたものだろう！ それを思うと恐ろしかった。人間の仕事の恐ろしさ、人間そのものよりもはるかにおそろしく、ほとんど怪物的とってよかった。」³⁸⁾と、いかにも彼らしい感慨を抱いたのだ。プロメトイスの火を受けついで人間たちが、やがて「怪物的」な現代文明を作り上げるに至る、まさに人間の仕事こそ人間を越えるものであるに違いない。ウィルも、「縛られたプロメトイス」の子として、また「知識の全能」を信じるアナの夫として、「ただ草木が茂り、河が流れている緑の大地、それだけが残ってくればよい」³⁹⁾のにといい、「エデンの園」への復帰願望を克服し、自分自身のための新しい創造を始めなければならないのである。もちろんそのためには、怪物的な現代文明を作り上げたような単に機械的な技術にだけ頼っていたのでは駄目である。新しい創造を可能にするためには、「アナと、子供たちと、そしてアナと子供たちと一緒に暮らす生活と、ただそれだけ」⁴⁰⁾であり続けて欲しいと願うウィルが、知識や技術に侵された現実世界の中へ大胆に入ってゆき、そこで自分の願望を生かすため新たにそれを鍛え直さなければならないであろう。そのための知識と技術を、彼は自分が経営する村の「木工塾」で教えながら学ぶことができるかもしれないのである。

彼はアナとどうしてもうまくゆかないため失敗ばかりしていた「エバの木彫」をついにこわし

て火にくべたあとでも、自分に「絶対的存在」を与えてくれるはずの「何かそれ以上のもの」を「たえず感じていた」⁴¹⁾ので、それが何であるか知るために、プロメトイスの火を、すなわち彼の木工術を中心とした様々の「術」を、何とか生かそうと努力せざるをえなかった。「絶対的存在」、あるいは「新しい存在」、「本当の自分自身」へ至らんとする内奥の願望に突き動かされて、彼は、夫婦関係の様々な失敗にもかかわらず、自己実現のおそろしく困難な道をどうしても模索せざるをえなかったのだ。それゆえ彼は、「二十年間」の結婚生活を経て、「強い現実感の裏付け」を得たあと、だんだんと「名もない庶民の仕事の中にある美がほんとにわかるようになって」、「自分も、もう一度ほんとに自己の表白であるようなものを、彫ってみたい気持になる」のである。だが、「粘土や石膏を使って、いくつも実に美しいモデル複製」は作れるのだが、どうしても自分自身の表現となるものが創造できない。模写をしても水彩画に手をつけてみても、最初は「清新さ、素朴な発刺さ」をだすことに成功しながら、結局、「模造物」しか作れないのだ。彼の描く「教会の塔は、たしかに存在を主張して」屹立してはいるのだが、「近代の著しく雰囲気」を主にした描法」に全くそぐわず、「それ自身の意味の欠落を恥じていた」⁴²⁾のである。

このようなウィルの限界を指摘することは実に簡単であるように思われる。たしかにキース・オールドリットの言う通り⁴³⁾、ロレンスは、ウィルをフラ・アンジェリコなどの初期イタリアの画家たちに熱中させることによって、彼の限界を明確なものにしている。だが、本当の問題は、果してそれほど簡単に批判し去ることができるであろうか。当然のことながら、これは、ウィルがいわゆる近代的な知性をもてば、彼がフラ・アンジェリコではなくセザンヌやゴッホに熱中すれば、それで解決されるような問題ではないのである。人生を、妻との関係を、不十分な形にしたまま、作品を創造する技術だけ発展させることはできないとロレンスが考えているところに、解決至難な問題の本質が存在しているのだ。ウィルが作品創造の初歩的な段階から一歩か二歩でも抜け出すためには、人生から知識と技術を獲得していく以外にないし、逆に、自分自身の「魂」を妥協させることなく夫婦生活の場に、社会の場に生かし切ろうとすれば、今度は天才の作品の「模造物」ではなく自分自身の表現をもたねばならなくなるのである。すなわちいくら小規模でも、自らが芸術家となって現実に何らかの形で自己表現をおこなわなければならないのだ。このように、自己と、芸術作品を含めた現実との絶え間ない緊張関係から創造的な生と作品が、すなわち「名もない庶民の仕事の中にある美」が生れるのであって、ロレンスは、ウィルとアナの闘いとその関係の失敗を通して読者にそのような「美」の達成の至難さを自覚して欲しかったのだと言えよう。そのような「美」を達成するためには、「エデン」を追われ「プロメトイス」の火を受け継いで「パンドーラ」の箱を開けた人類がどれほど苦しまなければならないか、その苦しさ困難さをロレンスは、「創世記」とヘシオドスのギリシャ神話を一つのよりどころにして、『虹』で我々に提示してくれているに違いない。

(続 く)

注

- 1) F. R. リーヴィス, 『小説家 D. H. ロレンス』文理, p. 154.
- 2) J. E. Stoll, *The Novels of D. H. Lawrence*, University of Missouri Press, p. 109.
- 3) D. H. Lawrence, *The Rainbow*, Penguin Books, p. 9.
- 4) D. H. Lawrence, *Studies In Classic American Literature*, Heinemann, p. 107.
- 5) K. ケレーニイ, 『ギリシヤの神話 (神々の時代)』, 中央公論社, p. 239.
- 6) 久保正彰, 『ギリシヤ思想の素地』, 岩波新書, pp 140-161.
- 7) D. H. Lawrence, *The Rainbow*, p. 10.
- 8) Ibid., p. 18.
- 9) Ibid. pp. 89-91.
- 10) ゲーテ, 『ゲーテ全集』(第四巻), 人文書院, pp. 356-9.
- 11) D. H. Lawrence, *The Rainbow*, pp 63-4.
- 12) フィリップ・ラーブ, 『文学と直感』, 研究社, pp. 252-276.
- 13) F. R. リーヴィス, 『小説家 D. H. ロレンス』, p. 190. J. E. Stoll, op. cit., p. 130-140.
- 14) D. H. Lawrence, *The Rainbow*, p. 242.
- 15) Ibid., pp. 416-7.
- 16) Ibid., p. 417.
- 17) Ibid., p. 242.
- 18) Ibid., p. 241.
- 19) Ibid., p. 238
- 20) J. E. Stoll, op. cit., p. 114.
- 21) 旧約聖書, 『創世記』, 6章の5
- 22) Ibid., 8章の21.
- 23) D. H. Lawrence, *The Rainbow* p. 150
- 24), 25) Ibid., p. 149.
- 26) Ibid., pp. 157-173.
- 27) Ibid., p. 162.
- 28) Ibid., p. 171.
- 29) D. H. Lawrence, PHOENIX II, Heinemann, pp. 594-5.
- 30) *The Letters of D. H. Lawrence*, ed. Aldous Huxley, Heinemann, ix-xxxiv
- 31) D. H. Lawrence, *The Rainbow*, pp. 186-7.
- 32) Ibid., p. 186.
- 33) Ibid., pp. 189-190.
- 34) Ibid., p. 190.
- 35) Ibid., p. 209.
- 36) Ibid., pp. 227-238.
- 37) Ibid., p. 238.
- 38), 39), 40) Ibid., p. 193.
- 41) Ibid., pp. 193-4.
- 42) Ibid., pp. 355-6.
- 43) Keiith Alldritt, *the visual imagination of D. H. Lawrence*, Edward Arnold, pp. 83-4.

(昭和51年9月28日受理)